

## 「奥」で働く男たち

江戸時代、将軍・大名やその家臣が政務をおこなっていた「表」に対し、将軍・大名の妻や子女が日常生活を営んでいた「奥」。NHKのドラマでも話題ですね。「奥」といえば、将軍や大名以外の男性の立ち入りが禁じられていた場所というイメージですが、最近の研究では、「奥」は将軍や大名自身も日常生活を送る場所でもあったこと、そして彼らの身の回りの世話を行う男性家臣が「奥」に出入りしていたことが明らかになってきているのです。

では姫路藩の「奥」では、どのような男性が働いていたのでしょうか？今回は、江戸城大手門前にあった酒井家の江戸上屋敷の「奥」、それも将軍の娘である喜代姫がその主人であったときの様子についてご紹介します。

喜代姫は、12代将軍徳川家斉の娘であり、天保3年(1833)に後の姫路藩主酒井忠学の元に入興した女性です。じつは喜代姫のような将軍の娘は、嫁いだ後も大名家の一員ではなく、将軍の身内として扱われます。そのため喜代姫は、これまでの姫路藩主の正室が居住していた酒井家の「奥」ではなく、酒井家上屋敷内に新設された「御住居(おすまい)」に住んでいました。そこに喜代姫は、旗本(もちろん男性)や江戸城の奥女中を引き連れて、入興したのです。

一方、従来の酒井家上屋敷の「奥」は、酒井忠学の生活の場になっていました。さすがの忠学も、将軍姫君の住む「御住居」で日常生活を営むわけにはいかなかったのでしょうか。つまりこの時期の酒井家上屋敷には、喜代姫と酒井家という二つの「奥」があるという、きわめて特殊な状態にあったのです。

この喜代姫の「御住居」については、残念ながら記録が残されておらず、詳細は不明でした。しかし近年、喜代姫の御産にまつわる儀礼の記録『御産一件 天』(以下、「一件」)という日記が発見されました。この「一件」は、酒井家上屋敷の「奥」勤めの男性役人で、酒井家の御用人を兼帯する小姓頭・番頭らが作成した記録です。そしてこの「一件」からは、酒井家の「奥」や「御住居」に勤める男性役人の姿を読み取ることができるのです。

### ○酒井家の「表」と喜代姫の「御住居」をつなぐ男たち

酒井家の「奥」や「御住居」に勤める男性は、どのような仕事をしていたのでしょうか？例えば「一件」には、喜代姫の御産儀礼の実施にあたって、酒井家の「表」の男性役人が「御住居」の女中に差し出した大量の伺書が書き写されています。ここで注目されるのは、この伺書は、両者が直接交わしたわけではないことです。

例えば喜代姫の着帯儀式的折(現在でいう戌の日の安産祈願のこと)、酒井家は江戸城の将軍家に対し献上を行います。この献上に関して、酒井家の「表」では、喜代姫第一子である喜曾姫妊娠時の先例通りの内容でよ

いのか問題となり、「御住居」の奥女中に問い合わせることになりました。

「一件」によれば、この「表」からの伺書は、酒井家の御用人を兼帯する小姓頭・番頭、つまり「一件」の書き手が「御附御用人様江差出候様、御附御用人江差遣之」(「御附御用人様」に差し出すよう「御附御用人」へ渡した)とあります。

紛らわしいですが、この最初に出てくる「御附御用人様」とは、喜代姫御住居にいる喜代姫に仕える旗本のこと、次に出てくる「御附御用人」とは喜代姫の「御住居」に付けられた酒井家側の役人のことです。つまり伺書は、酒井家「表」→酒井家の御用人を兼帯する小姓頭・番頭→「御附御用人」→「御附御用人様」をへて、ようやく喜代姫の奥女中らに渡されたことがわかります。

現在の私たちからみると、とてもまどろっこしく感じるやり方ですが、江戸時代の「表」と「奥」は直接の交流を制限されていましたし、さらに喜代姫の時代は、将軍家と大名家という身分の差もあったのです。伺書一つとっても直接のやり取りははばかれたのでしょう。

### ○「奥」の男同士の情報交換

先に取り上げた着帯儀式では、安産を祈願して喜代姫の腹に腹帯を巻きます。この儀式で使用される帯は、豊前小倉藩主である小笠原相模守の妻が献上することになりました。この一報が酒井家にもたらされた時、「一件」の書き手らは、「為心得」にそのことを酒井家側の「御附御用人」に伝えます。すると「御附御用人」は、「御住居之方ニ而茂、御附御用人様御附御用人江同断之趣若年寄様より御附御用人様江御達有之候段、被仰聞候旨申来候」(「御附御用人様(喜代姫付の旗本)」から「御住居」の方にも幕府の若年寄からお達しがあったと聞いていたので、すでに承知している)と答えたのです。

このやりとりからは、酒井家の「奥」や「御住居」に勤めていた男性たちが、伺書だけではなく、自分たちの持っている情報も交換していたことがわかります。喜代姫が将軍家の一員である以上、この御産儀礼は、酒井家・将軍家が共同でおこなわなければなりません。将軍家の不興を買わず、御産儀礼をつつがなく実施するためには、細かな連絡調整が必要です。しかしながら、先に述べたように、喜代姫の時代は、酒井家「表」と「御住居」が性別だけではなく、将軍家と酒井家という身分の違いによっても分断されていたので、情報の共有すらも容易ではありませんでした。このような状況を鑑みるに、「奥」で働く男同士の情報交換は御産儀礼の実施に不可欠であったと考えられます。奥女中と比べて、「奥」の男性役人は目立ちません。でも「表」と「奥」をつなぐ懸け橋として、彼らは日々奮闘していたのです。

「一件」は、「奥」の男性役人の姿を読み取ることができる貴重な日記です。

興味を持たれた方は、『城郭研究室年報』vol.28、vol.29にそれぞれ全文翻刻と解説が掲載されていますので、ぜひ一読してみてくださいね(M)。

